
浅倉さんと武東くんの1095日戦争

まめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浅倉さんと武東くんの1095日戦争

【Nコード】

N8635Z

【作者名】

まめ

【あらすじ】

嫌われ者の少女と人気者の王子様と呼ばれる少年の物語。

性格が悪い嫌われ少女VS人気者王子（腹黒）の1095日に及ぶ闘いの記録。

恋愛要素は少なめで、主人公二人はなんかずれています。

初めての一人称ですので、ただでさえ稚拙な小説が更に粗末な感じになっています。

私とストーカーとの出会い（前書き）

この小説は一人称で進んでいきます。各話ごとにくるくると視点が変わりますで、苦手な方はご遠慮下さいますようお願い致します。

私とストーリーカーとの出会い

まずは自己紹介から始めよう。私の名前は浅倉南美^{あさくらみなみ}。あれ、それなんかどっかのヒロインの名前じゃね。そう思った人は大正解。私の両親は揃って某野球漫画のファンで女の子が生まれたら絶対この名前と決めていたらしい。ただ名前の漢字が違うのは、苛められないようにという両親なりの思いやりなんだとか。うん。思いやるとこがずれてる。すっげえ迷惑。何この名前。死んでしまいたい。

しまった。話がそれってしまった。とにかく漫画のヒロインと一字違いの同姓同名なわけだが、彼女と違い私は外見が可愛くもなければ、性格も可愛くない。他人の面倒を見るとか大嫌いだし、そもそも家族以外の人間が嫌いだ。だからヒロインには絶対になれない。ていうかそんな状況は私にとって拷問以外の何物でもないのだが。男にチャホヤされ、常に誰かが傍にいたりとかマジで死ぬ。有り得ない。

また話がそれってしまった。まあ一言でいうと私は嫌われ者だ。愛想はないし、協調性も皆無であるから、周囲からは大人子供、男女に関係なく疎まれてる。それは私の心を時々、深く抉ることもあるが、だからといって今更に愛想よくなるうとも思わない。無理をしても結局は化けの皮が剥がれ、今と同じように嫌われてしまうのだから同じことだ。

そんな私には、どこをどう間違えたのかストーリーカーがいる。といっても、そいつは私に恋愛感情を持っていてるわけではなく、興味深そうに私を観察するだけなのだが。ただ気持ち悪いのは私を観察したいが為に、奴は受かっていた学区内一の進学校を辞退し、四つほどレベルを落とした私が志望する高校に二次募集で受験し直したのだ。まあ結局は学歴なんて大学で決まるから、天才の奴にとって高

校くらいどうということはないのだろうが、凡人の私からすれば人生を台無しにしてまで、私を観察したいとか気が狂ってると思えない。あれか。馬鹿と天才は紙一重とかいうやつか。ああ本当に気持ち悪い。

そんな私と奴こと武東^{むとう}知明^{ちめい}との出会いは、中学三年の卒業式の日だった。式が終わり友達も挨拶する人間もない私は、校舎の屋上から運動場で騒ぐ生徒達の様子をフェンスに背を預けて見ていた。その中の一際騒がしい集団の中心に武東はいた。奴は群がってくる煩い女子共に笑顔で対応し、優しいことに一人一人と記念撮影をしてやっていた。

武東は眉目秀麗、文武両道を地で行く人間で女子からは王子と呼ばれており、人間に全く興味がない私でさえ知っているのだから、本当に奴は学校内ではかなりの有名人だったのだ。まあその時の私はただぼうつとその様子を見て、ああ王子って大変なんだなあ。あんなに煩い女共に囲まれて可哀想に。とそんなふうに思っていた。

その日は三月の初めにしては気温が高かった。ポカポカと心地の良い日差しに誘われて睡魔に襲われた私は、つついその場に座つてうとうととしてしまったので、その後の武東がどうしていたのか記憶にないのだが、ふと目が覚めると屋上の入り口付近に武東が立っていた。丁度、私が座っている位置から左斜めの正面に奴はいたのだが、私に気付いていなかったようで普段はニコニコと穏やかな表情を浮かべている顔が、眉を寄せて般若のようになっていた。有名人の意外な一面に私は、ただただ驚くばかりだったが、奴は私に更なる衝撃を与えてくれた。

「ああ。煩かった。何で女はああも煩いんだか。群がってくるあいつらは本当に蠅のようだった。殺虫剤まいたら死なないかな。コロツと逝っちゃえばいいのに」

王子にあるまじき発言をかましてくれたのだった。その時の私の心中は驚きで嵐のように乱れていた。ちょ、何この人マジで。私よりに性格悪くねとか。いくら人間嫌いの私でもそんなこと言わねえよ。

煩かったとか迷惑だったとかは言うかもしれないが、死ねとか言わねえよ。なにこいつやばい。やばいけどでも面白い。私の嫌いな煩い女子共が、好きな人から嫌われてるとか面白すぎる。とこんなふうに心の中でマシンガントークを繰り返していたのが悪かったのか。「はあ。王子って性格悪かったんだ。私よりいい性格してんね。でも面白いな。女子共が今の聞いたら泣き喚くんだろうな。ああ、見てみたいなあ」

思わず声にそう出してしまったのだ。今、思い出してもへこむ。あの時なぜ声に出してしまったのか。そもそもなぜ屋上に行ってしまったのか。なぜもつと爆睡出来なかったのかと自分を責めてしまふ。そうすればストーリーカー被害に遭わずに済んだというのに。

「へえ。そういう君も性格悪いよね。僕なんかより、ずっと君のほうが面白いと思うけどなあ。ねえ、誰からも嫌われるってどんな感じ？興味あるんだよね。ちょっと君の生態を観察してもいいかな？なにせ全てにおいて僕と正反対だからさあ。君といると退屈しなさそう。これからずっとそばで見せてあげるからね」

般若から普段の顔に戻った武東は、ニコニコと微笑みを浮かべながら堂々とストーリーカー宣言をしてくれた。

「はあ？お前は何様だ。死ねこの野郎。きもいんだよ。見ててあげるってなんだ。いらねえよ。王子だからって、私のことなめてんじやっ…アタタタタ！痛い！痛いっ！」

武東の言葉にふざけんな死ねと思った私は、思わず喧嘩を吹っ掛けてしまったのだが、その啖呵は言葉の途中で終わってしまった。なにせ私は、いつの間にかすぐ近くに移動してきた武東にアイアンクローをがつつりときめられていたのだから。ちよ、おま、痛いんだよ！なに女の子に握力全開できめてんだよ！あれか、死ねとか言わねえよとか言ってたけど、ものの数秒でお前に言っちゃったのを怒ってんのか。悪かった。悪かったよ。私もお前と同じくらい性格が悪かった。謝るからさっさと離せ。離せれば。

「離せって言うてんだよこの野郎！痛いっつってんだろが、この

腹黒野郎が！」

あまりのアイアンクローの痛さにキレた私は、つい右手に持っていた筒に入った卒業証書で武東の左頬を張り飛ばしていた。怒りにまかせて持てる力を全て使ったその一撃は、奴の唇の端を切っけしまつくりの勢이었다。

あ、やばいやつちやっとなと思ひ、私はそろつと武東の様子を覗き込んだ。やばい殴られるかな。その時は本当にそう思つた。なにせ武東の体は小刻みに揺れていて、怒りのあまりに震えているのだと感じたのだから。

するとしばらくして武東は腹を抱えて笑い出したのだ。それはもう。狂つたように笑つていた。もう、今更感が半端ないが、あ、こいつは関わつちやいけな人種だつたんだ。と気付いた私はダツシユでその場から逃げだした。

「逃げてても無駄だからね。浅倉南美さん」

とそんな恐ろしい言葉が背後から聞こえてきたが、私は聞かなかつたことにした。今日は何もなかつた。誰とも出会わなかつた。そう自分に言い聞かせてとにかく走つて家に帰つた。

そうしてそれ以来、私は武東と会うことはなかつた。桜が舞う四月の入学式がある、とある日の朝に奴が私の家に迎えに来るまではの話だが。

そついうわけで、あれから私はずつと武東知明にストーキングされ続けているのだ。

僕が獲物を狙う理由（前書き）

今回は武東知明の視点です。

僕が獲物を狙う理由

やあ。初めまして。まずは自己紹介から始めようか。僕の名前は武東知明。知に明るいという名前の通りに成績優秀。おまけに運動神経は抜群で、容姿は端麗と三拍子そろった自分で言うのもなんだけど完璧な人間だ。更には表向きの性格がいいので学校中の女子からは、王子とあだ名をつけられ騒がれている。老若男女。全ての人から僕は好かれやすいと思う。

本当は王子だなんて馬鹿馬鹿しいあだ名で呼ばれることも、女共が煩く騒いでまわりつくことも、男共がそんな女を引つ掛けようと僕を利用することも煩わしくて仕方がない。そもそも他人に興味などないし、関わりたくなどない。この日常が煩わしくて退屈で仕方がないのだ。

でもこの社会で生きて行く為には、どんな嫌なことがあってもニコニコと笑ってやり過ごしていくしかない。人と違う特徴を持つ者は排除されやすい。特に日本において、それは著しい。だから僕は何があっても我慢してきたのだ。

それだというのに僕とは正反対の人間が身近にいる。そいつは周囲の人間に嫌われ、かといってそれを気にするわけでもなく、ただ一人で自由に生きているのだ。その姿を見ていると僕は非常に腹が立ってくる。僕はこんなに苦勞をして、周囲に溶け込もうと努力しているのにお前はなんなんだと。理不尽な怒りだと理解はしているのだが、どうしても抑えることが出来ない。

そいつ浅倉南美は大きな目だが、切れ長の日本人形のような雰囲気のある美少女だ。ただ僕と違うのは、頭の出来があまり良くないことと、その性格の悪さを隠さずに堂々と生きているという点だ。特に女なんて生き物は常に群れていなければいけないので、さぞや

今の孤立している状況は辛かろうと思うのだが、浅倉はなんということはないと淡々として日常を過ごすのだ。彼女に対する悪口や嫌がらせも全てスルーして生きている。

浅倉は学園での有名人だ。ただ悪い意味で、という冠詞が付いてしまうのだが。他人に興味のない僕でさえ、登校すると一日に一回はどこかで彼女の悪口を聞くくらいなのだから。

僕が彼女に構うようになった切っ掛けは、本当に簡単に単純だった。中学の卒業式の後、たまたま上がった校舎の屋上に浅倉がいた。それはそれは気持ちが悪さそうにすやすやと寝ているものだから、思わずまた理不尽な怒りがこみ上げてきたのだ。僕はうざったい女子の相手をしてきて、へとへとだというのにお前は気持ちよさそうで良いご身分だなあ。なんて本当に愚かだが、抑えようのない嫉妬のようなものを感じた。

そうこうしている内に目を覚ました浅倉が、ぼんやりとこつちを見ているのを知った僕は、普段は無表情なこの女の顔をどうにかして歪ませてやりたいと思った。そうすることで、胸の内に抑えつけているこの怒りをやり過ぎそうとした。

「ああ。煩かった。何で女はああも煩いんだか。群がってくるあいつらは本当に蠅のようだった。殺虫剤まいたら死なないかな。コロツと逝っちゃえばいいのに」

お互い違った高校に進学するのだから、最後ぐらい本性を見せてしまっても構わない。どうせ相手は嫌われ者で、このことを話す友達すらいないのだから。そんなことを考えた僕は、人の悪い笑みを浮かべたように思う。浅倉のほうをちらりと見ると彼女は、今まで誰も見たことがない驚きの表情を浮かべてこちらを見ていた。すると楽しい、面白い。そんな感情が僕の中に思わず湧き上がってきた。「はあ。王子って性格悪かったんだ。私よりいい性格してんね。でも面白いな。女子共が今の聞いたら泣き喚くんだろうな。ああ、見てみたいなあ」

さあ、浅倉はどうするのだろう。そう期待に満ちた目で見ている

と彼女は、こちらが拍子抜けしてしまうような言葉を口に出した。

なんだこいつはと本当にそう思った。僕は彼女から非難されることを期待していたというのに、彼女は面白いと言いつつ放ったのだから面白いのはお前のほうだろう。なんなんだその反応は。

「へえ。そういう君も性格悪いよね。僕なんかより、ずっと君のほうが面白いと思うけどなあ。ねえ、誰からも嫌われるってどんな感じ？興味あるんだよね。ちょっと君の生態を観察してもいいかな？なにせ全てにおいて僕と正反対だからさあ。君といると退屈しなさそうだな。これからずっとそばで見せてあげるからね」

少し驚かしてやれ。なんだったら泣かせてやろう。そう思ってわざときつい言い方をし、最後に自分でもちょっと気持ち悪いなあと思うことを言っちゃった。さあどうだ。

「はあ？お前は何様だ。死ねこの野郎。きもいんだよ。見ててあげるってなんだ。いらねえよ。王子だからって、私のことなめてんじやっ…アタタタタ！痛い！痛いっ！」

うん。自分でも気持ち悪いとは思っていたけどね。なんだろうこの目の前の女から言われるとすぐ腹が立つ。思わず小奇麗な顔にアイアンクローを黙れという気持ちを込め、渾身の力できめてしまふほどに腹が立つ。

「離せて言っただよこの野郎！痛いっつってんだろが、この腹黒野郎が！」

そうこうしているうちに、ブチギレた浅倉が持っていた卒業証書で僕の左頬を思いつき殴ってきた。正直に言っただけで痛い。唇が切れてしまった。この女。殴ってやろうかと思ったが、ふとあることに気付いて止めた。

ああ、僕は今。全然退屈じゃない。むしろ楽しいくらいだと。この女の傍にいと退屈しない。なんだろう。僕が普段、押し殺して生活をして溜まってる鬱憤が、浅倉の素直だけれど気遣いの欠片も見当たらない。そんな言葉を聞くことで、発散しているように感じた。常に窮屈な日常だったというのに、彼女といるとすぐく楽に

なるのだ。

それが僕は嬉しくて嬉しくて、笑いが止まらなくなってしまった。笑い続ける僕から必死に走って逃げる浅倉を見た僕は、思わずこう言ってしまった。

「逃げてても無駄だからね。浅倉南美さん」

そう。逃げてても無駄だから。こんなに僕を楽しませてくれるものに出会えたのは、人生で初めてなんだ。絶対に逃さないから覚悟しておくがいい。

「なぜだ。なぜ私の家を知っている!？」

浅倉と同じ高校に受験し直した僕は、入学式のある日の朝。彼女の家までわざわざ迎えに行っちゃった。いいなあ。その嫌そうな顔。本当に面白いなあ。

「浅倉と友達になりたいんですって君の元担任に話したら、すぐに住所と電話番号を教えてくださいけど？優等生って便利だね」

「くっそ、あのハゲ頭！死ねえ！」

そんなふうに住宅前で叫ぶ浅倉に僕は、また笑いが止まらなくなった。ああ。ああ、本当にこの子は面白い。僕のストレスをたっただけだけの言葉で、吹っ飛ばしてくれるのだから。

そういう訳で僕、武東知明は浅倉南美に付きまとうことにしたのだった。

私がストーリーカーに騙されるようになった切っ掛け（前書き）

浅倉視点です。

浅倉さんの馬鹿さ加減が半端なく、ストッパーとなる人物もいないので有り得ない感じに話が進みます。

私がストーカーに騙されるようになった切っ掛け

「武東。一緒に歩きたくないんですけど」

私は今。入学式に出るため、家から学校まで十五分の道を歩いて登校している。それはこれから毎日のように繰り返すことなので、別にどうということじゃない。ただ横にいる男が気にいらぬ。なんで武東がいるんだ。こいつと一緒にいると、ろくでもないことが起こりそうでなんか嫌だ。こいつは見た目と外面だけは良いので、だまされた女子にどんな嫌がらせをされるか分かったもんじゃない。いくら私が他人から嫌われ慣れてるからといっても、入学してすぐにわざわざ自分から敵を作るうだなんて思わない。私はMじゃない。苦しいこと辛いことは、絶対にごめん。

ん？今気づいたが、武東。貴様、なんで私の右手を握っている。こいつは一体なにを考えているんだろう気持ち悪い。そんな思いでちらつと武東を見ると、奴はものすごく楽しそうな顔をしていた。なんかすごくイラツとくる顔だ。

「ねえ。右手つないでるのなんなの？なんか意味あんの？」

私の問いかけに武東は一瞬、え、というような顔をしたが、すぐに笑顔になると私が今まで知らなかったことを教えてくれた。

「何？浅倉さん。今まで知らなかったの？男女で友人になったら、こういうように移動する時は常に手を繋がなきゃいけないんだよ。中学の時にも何回か見掛けたことぐらいあるでしょ？」

なんと！そうだったのか。なんで奴らは手をつないでいるんだと思っていたが、そんな決まりごとがあつたなんて驚きだ。

「そうなんだ。知らなかったよ。でもさあ、私はいつあんだと友達になつたっけ？武東とはアイアンクローをきめられた仲ではあるけど、友達になつた覚えはぜんぜんないんだけど」

あれは本当に痛かった。一ヶ月も前のことだけど、思い出すとま

だごめかみというか頬骨というか。とにかく、そのあたりがズキズキしてしまうくらい痛かった。今度、こいつの隙を見て仕返ししてやる。私の渾身の力を込めたアイアンクローを味わうといい。

「ええ！まさかこれも知らなかったなんて！」

武東はさつきよりも大きく驚くと立ち止まり、信じられないといった顔でこつちを見てきた。なんだその可哀想な生き物をいる目は私は全然、可哀想なんかじゃないからな！ちよつと周りの誰からも嫌われてるだけで、友達も今まで一人もいなくて……。顔も残念だから、彼氏もないし……。さ、寂しくなんてないし！か、可哀想じゃないんだからね！今、目の横からちよつとでちゃったのは、涙じゃないんだから！汗なんだからね！？

いろいろ考えてしまつて悲しくなつてしまつたが、それをごまかすように私は顔を少し上げて武東をにらんだ。くそ。なんで私より身長が高いんだお前。こぶし一つ分でも許しがたい。

「ごめん。ごめん。そんなに睨まないでよ。君があまりにも常識を知らないもんだから、吃驚してしまつて。あのね浅倉さん。男女の間では、アイアンクローをどちらか一方にきめることが、友達になりましてつていう証なんだよ」

え、そうなんだ！じゃあ私と武東は、もう友達というわけなのか！知らなかつた！ム力つく奴ではあるけど、そんな武東が素で驚くくらいなんだから、私はよつぼどの常識知らずだつたんだ。危なかつた。そのまま高校に入学してたら大恥をかくところだつた。それなのに私を馬鹿にしないで教えてくれた武東は、なんだ案外良い奴なのかもしれない。それにこんな私と友達になつてくれていたなんて。

ちよつと気持ち悪いところとか、ム力つくところとかあるけど、それは性格の悪い私のほうがもつといっぱいあるだろうし。そんな武東を嫌な奴だと思つていた私が、一番嫌な奴だつたんだ。

「そうなんだ。私、その。友達が今まで一人もいなくて。だからそういうことも知らなかつた。ごめんなさい」

私は武東と合わせていた目を伏せて、自分の常識のなさと性格の悪さを恥じた。常々、自分の性悪さは自覚していたが、私の本性を知りそれでも友達になりたいなんて言ってくれていた人に失礼な態度をとっていた自分が本当に情けない。

「なんだ。そんなこと気にしないでいいよ。じゃあ、これで本当に友達だからね」

「うん！ありがとう武東。嬉しいな。人生で初めての友達だ！」

そう言った武東に私は、とびきりの笑顔を向けた。その時の奴がどれだけ必死に笑いを堪えていたのかを知らず、本当に馬鹿みたいにヘラヘラと笑っていた。よくよく見れば奴の肩は上下に細かく揺れ、口元はひくひくと動いていたというのに。人生初の友達ゲットに浮かれていた私は、それに気付かなかった。本当に馬鹿だ。

驚くことにそんな私が、武東の嘘に気付いたのは約一年後の春のことだった。まあ、その話はまた別の時にしよう。

とにかく、これが切っ掛けで私。浅倉南美は、武東知明のとんでもない嘘に騙されるようになったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8635z/>

浅倉さんと武東くんの1095日戦争

2012年1月1日01時12分発行